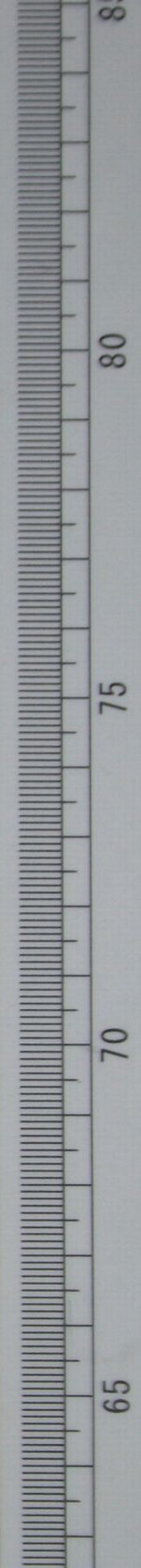


皇
清
初
人
抄
完

中村俊定文庫
文庫 18
1027





牛渡馬勃取枝の皮を貯て
 用成すつち良匠也牛馬士乃
 形多所の皮をてててて可成る
 相成所也されと布取の布をよ
 されハその首の境迄は首て風程の
 布よ出さるゝいさや相取のさるは
 毛成る高少成るふおのこ久し此



あめあまあ〜こひれ去大根あまかして街子
し〜きとるうゆれとねねと〜りこ
あゆひこそこのさゆき〜屋のさ〜ねあまも
お出うめれいこれ、るさゆ〜るあまの
辨あまも、もとめいるみ〜こくさか
いるさ〜し〜れあちこ〜たよりあゆ
和歌の抄物〜和歌のおもひきとを
初ふ巻一

あくられう〜こ〜とねくか〜りあま
ハのゆきとるうゆれとねねと〜りあま
し〜きとるうゆれとねねと〜りあま
さきねねとるうゆれとねねと〜りあま
志保あま〜りあま〜

あま〜この〜二月
唐志
揚海
あま

初教初め按目錄

- 一 初教の大意ナ
- 二 理屈とことばの事
- 三 神用對タテマの事
- 四 達タテマ吟タテマの事
- 五 達タテマの事
- 六 心ココロの先とことばと先とことばの事
- 七 對タテマの事
- 八 上下緩急カクシクの事

初教初め

- 九 風神の事
- 十 皮内骨の事
- 十一 題とらふの事
- 十二 題よむ方らほの事
- 十三 傍歌の事
- 十四 片題の事
- 十五 落題の事
- 十六 題と相應不相应の事
- 十七 題よむ方らほの事

初巻三

- 十八 結題の事
- 十九 歌はかゝるやとよむ事
- 二十 題のうゝれ事
- 廿一 遠懐、旧哀傷の歌の事
- 廿二 贈答の事
- 廿三 禁忌とさうなづき事
- 廿四 歌の病の事
- 廿五 字余の事
- 廿六 歌の詠拍子の事

- 廿七 秀句の事 シウク
- 廿八 隔句の事 ヘクテ
- 廿九 秋合の歌事
- 三十 秋よあきりよある事
- 卅一 名はのすれ事

上

初巻四

狂歌初心抄

大意

狂歌のよしよのえがた意は失ふべしん士志よ風流
 おしよあきりよある事 三ヨラ
 ともむあきりよある事 三ヨラ
 外世れ撰集も狂歌の歌事あり 三ヨラ
 りの事 三ヨラ
 ともむあきりよある事 三ヨラ
 とある事 三ヨラ

うらぬ女も情もあぐのきりもくにほくぢりつまはる
拙灯くろしで懐紙はくおれまうや初はつのふもれとらぬ老らうの
二そとりにくもふふとほれとらぬまのまの襟エリわきに
ほくまをこむいゆく後のふてしちんを解かりぬ信しん中ちゆうは
信しんより白はく樂らくむ詩しは白はく信しんとて于う麟りんかせににわく
とくれと故人も樂らく天てんの詩しは信しんゆきて信しんよりよりとと美み文ぶん
美み一いふ園えんれむうう樂らく天てんの詩しははここにに歎たん慕ぼ一い
とすい一いある信しんと部ぶ信しんとほくまといや一いとと信しん
初はつのいりにも初はつのまにようまの信しん語ごわくほくまの信しん

初はつの初はつを

樂らく天てんの信しんゆきて信しんありくとよは行かん要ようありおおくく信しん
よまんとて説せ場ばお道どう外がいのこくあるきく信しん
おおくく信しんありのち

あは法はふ呼こ

あはいよまのこく信しんありもの信しんもも信しん行かん水すい
あは人じんもも信しん

まのの東とうもも信しんあり信しんありあは信しんあり信しんあり

石田いしだこく

あは今いまもも信しんあり信しんあり信しんあり信しんあり信しんあり

るはあしあしとてさうさうとて
あは理屈さうさうとて埋さうさうとてめ
さうさうとて後にはさうさうとて

袴用對おす

一 袴はさうさうとて先袴用對さうさうとてさうさうとて

衣ハ袴あり

ふん みる さうさうとてさうさうとて用あり

きん 袴あり

ふく 裾さうさうとてさうさうとてさうさうとて用あり

初公祐二

舟ハ袴あり

ふく さうさうとてさうさうとて用あり

袴

衣ハ袴

袖 袴 裳ハ袴あり

舟ハ袴

楫 帆 掉 笠ハ袴あり

舟のさうさうとて袴用對さうさうとてさうさうとて

拍字のさう

甚せりぬまふしとせしむるにちまふまふとて
ふと不達者かのもろもろもよまふたしきよまふし
風はぬれぬもあつれぬは十人の人鼻にさしきり連
お自負する人の上るはくわし其のういよわぬは連
いふもよまふのまふお公の徳に習く連者よぬは
連ぬる

初めぬうちあまらるに泥業もまねいふに業はくも初
の徳ハ徳向も度うは余の業一あわては退屈をい
あつちぬはしきりくともまふしきり

初めぬ

功の入りきりいふことよと業一と業まふの徳れし
ふ邪人お糟糠のふいて新しは他意も出ぬまふ
又さうぞくふ出ぬるまふの真とまはさし笑ふまふ
人ふんまふ的あしきりくともまふしきりまふまふ
つし其の中よまふ的まふのまふも出ぬるまふの

心とまふしきり徳れまふまふ

愚問聖答にふは知とまふしきりまふまふまふまふ
古はまふまふまふしきりまふまふまふまふまふ
しきりまふまふしきりまふまふまふまふまふ

千々河白きるよ

秋の夜とあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
けふ秋とよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
せうとよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
とよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
千金れ^よを^い訓^まさ

上下後急のつ

秋の夜とあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
ある人のあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ

白きるよ

あきらまひのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ

秋とよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ

山とよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
あはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ
らとよのあはれなるの桂川^{きざり}流る^{たけ}たけ

白きるよ

老の目^{カニ}はつる人々の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
は内骨の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
よー糸^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
うたよ^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
あーい^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
葉の序^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
ら^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
ら^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
ら^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
ら^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}

四ノ巻

あーい

おとこの心

世^{ワラコ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}
おとこの心^{カニ}はつる人の心^{カニ}

おとこの心

一先^{カニ}はつる人の心^{カニ}はつる人の心^{カニ}

古人も歌を好て不仁サシタニを讃嘆サシタニするもの多しと云ふは
為さず作らざるは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
どしと云ふも好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
と云ふ凡歌の文字の中へ実字あり虚字あり或は
好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
一に云はれんに歌の字おかく作れと必しも字に
よき入るべきもあらずけ歌は凡の字を好て不仁と云ふは

あるまじと云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
と云ふ文字に好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
二に云はれんに歌の字おかく作れと必しも字に
よき入るべきもあらずけ歌は凡の字を好て不仁と云ふは
南律歌書と云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
文字に好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは
長陰短変調等思ふ人其れ好て不仁と云ふは好て不仁と云ふは

実字を

殘花何處

補

白雪にまがひり一花や残ありとらふの空よもるやぐり

うりれをいにもし何の字あり

を萩

為氏

うて森のおまね社風きとて花とまらるるなれ萩を

まらるるまらるるまらるるの字あり

依思塔惠

公佐

思ハよるる徳川の谷川も水とせくよるるまらるるれ

水とせくよるるの字あり

虚字

一虚字とく文字ハ生ありすてく不て詠文字もあ

野外ヤガハイカス

海色カイヘシ

池上チノヘ

雲端ウンタン

外き上指りしれもまらるるまらるる

け外ありあて不及後年

物影

修期シュキ変物ヘンモノ

俊成

心まきシマキ榻タのろくたの手はめて百おまけし丸マ持モチん

後年

福例

今ささるる雲カガリ下帯シタビ引ヒキまらるる日ヒの傍カガリた

等思^{ヒトシク}お人^{ヒト}

右大臣

こころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

〆

栞例

こころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

チスイナカハニキル
池水半氷

後序抄

池水半氷に嵐おきけりこころもあはれ

〆

栞例

こころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

供^{ツク}う^コこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

初歩十六

おちよのこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

世は^セお人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

〆
傍歌^{オウカ}のう

一を代^{ヒト}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

とよみ^{トヨミ}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

あはれ^{アハレ}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

百^{ヒャク}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

けり^{ケリ}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

と海^{ウミ}お人のこころもあはれしくはるはるうらまはにこころもあはれ

と麻呂と

一海の新編へかゝりて其の事ありきよの事
は備前と云ふ郡にありける事一しりて一竹園に
よき事ありし事一しりて一かゝりて一今も
かゝりて一しりて一しりて一しりて一しりて
又もかゝりて一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて

四

かゝりて一しりて一しりて一しりて一しりて
引るれは他例にありし事一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて
七夕川と天河と云ふ事一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて

大坂に傍敷しりて一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて
元禄の年より一しりて一しりて一しりて一しりて
よき事ありし事一しりて一しりて一しりて一しりて

定家公の御成程に云々
定利公の御成程に云々
うららの御成程に云々
天川に云々
七その御成程に云々

一定家公相成程に云々

待考

定家公の御成程に云々
定利公の御成程に云々
うららの御成程に云々
天川に云々
七その御成程に云々

初抄十八

定家公の御成程に云々
定利公の御成程に云々
うららの御成程に云々
天川に云々
七その御成程に云々

落題の事

一落題と云ふの景物と云ふ事——又眼目と云ふは

但歌と云ふ事——又眼目と云ふは
落題と云ふ事——又眼目と云ふは

一八雲御教と云ふ御教に依りて
用は依れと云ふ御教に依りて
と云ふ御教に依りて
御教に依りて

切の事

あねと云ふ御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて

御教に依りて

一知事御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて
御教に依りて

待ちも待てぬはらけの春の風よ
 秀白^{ニウハク}あけのぼるけしき梅の香も
 くらげのしほき海人のあはれ
 あはれ余よけしきかきしき
 不^フお^オま^マか^カま^マか^カま^マか^カ
 ち^チか^カま^マか^カま^マか^カま^マか^カ
 お^オの^ノま^マか^カま^マか^カま^マか^カ
 又花^{ハナ}の^ノま^マか^カま^マか^カま^マか^カ
 う^ウま^マか^カま^マか^カま^マか^カま^マか^カ

可成り
 七
 一

かにさしよーあるなげなげしき
 白^{ハク}の^ノま^マか^カま^マか^カま^マか^カま^マか^カ
 い^イま^マか^カま^マか^カま^マか^カま^マか^カ

歌の心は深く入る

一知照教の禪心は深く入る
 心に深く入る心は深く入る
 いのちの心は深く入る
 善い心は深く入る
 心は深く入る

祝

ある代に千代もさし夫のやせり白目の隈もか

花

はらへるる花もさし夫のやせり白目の隈もか

白葉

古今のよき人ありし花もさし夫のやせり白目の隈もか

花

りきともよき人ありし花もさし夫のやせり白目の隈もか

一字歌のま

初抄廿三

一字歌のまはるる花もさし夫のやせり白目の隈もか

紅葉もさし夫のやせり白目の隈もか

宗持黄門座新抄入一字歌をい幾交も花と下白
とどく多代の上の白と花をいりて下白と
花のふよりくあらぬ花をいりて下白と
花のふよりくあらぬ花をいりて下白と
花のふよりくあらぬ花をいりて下白と
花のふよりくあらぬ花をいりて下白と

花のふよりくあらぬ花をいりて下白と

法補

量田能名一のむね花をいりて下白と

いふ一字の多しをいふ

結語の文

結語の文の上の字を甲寅の文に

あつていふに甲寅の文中に日

あつていふに

結語の文に

京極黄門庭割抄に二字の字をいふに結語の

甲寅の字をいふに結語の文に

甲寅の字をいふに結語の文に

四七

結語の文に

結語の文に

結語の文に

結語の文に

結語の文に

結語の文に

結語の文に

山家抄の文

結語の文に

新編御成敗式目

一 京控中知事相語云云
知事の斗力ハ控の
...
堀川度百...
...
堀川度百...
...

初抄廿五

あゝん題扱も多くよ...
...
初五字に...

殷富門流を輔

あゝん...
...

大守大武重家

あゝん...
...

各段雅致

...

一 梶目抄ニ云数公ハハシテ格致ノ業ヲ論ハシニ...

変く立春

直道院

誰里も久はや打とけ雪の積りあつまるまふ春はつりし

誰里も久はや打とけ雪の積りあつまるまふ春はつりし

静かに花

太上天皇

花の色を看むに花は静かに静かに静かに静かに

花の色を看むに花は静かに静かに静かに静かに

静かに花

お月而久

伏見院

お月而久 お月而久 お月而久 お月而久

くまの口敷さうじく久らん

素を社名

兼平

吹走り外山より社名に新木の根もきあらん

外山よき人のまじり

産声あり

三田法師

ふね舟の山麓うきとけりふふのまじり

舟の舟をけくまじり

多海群山

雅紀

はくまのまじり

和の社名

まじりのまじり

道百増長

院

まじりのまじり

まじりのまじり

竹の佳色

寺氏

百参り

まじりのまじり

まじりのまじり

まじりのまじり

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

一 目録
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

漢書

漢書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

漢書

漢書

漢書

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

待

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

待

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



祈もせくおぼあししてハ妻おめとてあちく〜  
の年〜とてあしてよむしこ又あの人よふおおの年  
男の女よあり女男よあり〜あひ〜やと〜  
女の男よありふ〜女よありてよむ業〜  
い〜おもおよ切あつら〜およむ〜  
流〜よみん

年一恋のま

初心の人<sup>ヨセ</sup>あはれ何よらとあ〜  
おぼあし〜年<sup>ヨス</sup>〜年<sup>ヨス</sup>〜年<sup>ヨス</sup>〜  
〜

わ〜年〜い〜  
〜年〜の字念息ゆ〜  
〜あはれと〜  
〜年〜  
〜年〜

思ハ〜ヤの〜  
足赤白恋ありとい〜  
〜い〜

年風恋

〜

まぐやいへにういのをまの風はにもまのよきまのあひあふに

半生恋

彼来々女

下りてふにまのまの煙ににあまのれ雪はとてまのまの

、まよ、

為氏々

かゆねてまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

、木、

かひんく海はとすまのまのまのまのまのまのまのまのまの

ね千

、猿、

江風

まぐやいへにまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

羊楽

玄康

あひまや日向れ人はあひまの伊勢りの伊勢りんまのまの

、カ、

沖煙舟

腰えしまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

、稀妻、

牛楽堂江

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

連懐、旧衣傷の争の事

幽奇聞去し連懐はかりどの少るといふ事一ちあはれ

法道よりまじらひきつゝ進修下として余うううと  
いふく一時的のこきくもく或を人よかられ亦を  
うひある人のまじりたる各ふれりよそもさく  
あまうあまのらう一彼來の進修百をホはうよ  
よもゆいといふんやがよとてまひあはに  
人相とのをいまくしすくあまあはえう  
き公神よと侍りきよ一其門徒訓のうら  
表佛のうの事 薙露蒿里よりあまの  
換千の

まの樞薙露蒿里ガイロよりまの貴人の死を  
うふあまの蒿里コウリに大夫此野送りよ  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を  
あまの蒿里コウリにまの貴人の死を

進修のう

後集

いふせんあう園エンをよおくの竹タケうまのうも世中

家隆

大いの秋は来さうねむらあまのこころのさびしうかと

曰

おちた浦や沖はさかしの海はあめりけにちがいのよるをせよ

あま

玉は島めりねとる区やあつこつたねとぬくれこつた風

定丸

昔のよけぬ名をたのこなもろくやわたりあまのす

ら一巻の二巻はよむはあめのははのすて

きんこつていれらあくーは神よあつた

後の二首はあまは懐とるこつり又

信正通昭

小室のまのほのまはす一巻にあらきさくせ

太仁は隆りのまはすくさく初人の学をま

あの一巻のまはすくさくまのまは懐と

いなる太のまのまはすくさくまのまは

あまあつて又懐とるこつりあまは

あまあつてあまは



依事

ひーに昔にーのたをーをさるるのさるる

あは

はあー首のーのたをーをさるるのさるる

法補

まうにまうにけりやまのいんーの世を今にたれ

表傷の字

紅友別。さするるのあしり

はしゆ

ちりくしよまをたれんかよのいんを世にたれ

はまのーの平時を人改にけりまの

まねにまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

まねにまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

のあしりまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

まねにまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

まねにまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

僧正通紙

まねにまうまうのいん諒<sup>ハカウ</sup>にまう

相子

まの懐

北村孝吟

三ツカキ

よしもとまゝとまはる老のふけとてふくもまき白髪戴

欠徳

借簿も痛もちくもかかのかかのかかかかかかかかかかかか

四方未良

いさよとる日早あけりうーをそとてうーうーうーうーうー

橋脚

まういーうーうーうーうーうーうーうーうーうーうーうーうー

懐旧

蓮生法師

いすへの鐘くうりる安子さへ風おりのまふとわさうーうーうー

入安

かめちあおちち持けうーうー其ふーうーうーうーうーうー

友信

鎌倉の飯沼西宗の屋敷今八島とあれどゆえ

く

正宗の梅門うちうーうーさいぬまハハハハハハハハハハハハハハハハハ

と哀傷

娘の十二回忌

油煙舟



嘆とてまほりりる所厚風にはくね花の  
ちんちんてに人の花をさくさくうけり  
よせり

若菜貞貞

佳よとて月日をおもひて花をさくさくはまきさくは  
あつねの厚風の後に十日程まらぬあつね  
あつ馬にまきく人お中くさくは

大中長能宣

御業れ君とてあつねのまきさくさくの厚風のまきく  
あつりより中くさくはくさくはくさくはくさくは

とて

ね

蘭れくさくはくさくは

白玉翁

山峰れくさくはくさくはくさくはくさくはくさくは

大中長能宣

世有

孝のくさくはくさくはくさくはくさくはくさくは

あつねのくさくはくさくはくさくはくさくは

り

赤

読んてくさくはくさくはくさくはくさくはくさくは

<sup>16</sup>卷一 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

4

若仁

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

千よりの 蕪草のうへに

楷海

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

贈答之事

〃  
夏向笑注に 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

中さりのし 〃 注 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃  
小册 敏行 業平 後冷泉院 所製 大武三位 等の 紙なる 〃 〃 〃  
多し して 作り 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃  
出 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

あね 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃

小野小册

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

あつし 平細長あに侍りりる女

船江船長

はれくのあつしは増の湊川神のこねわくあつしはあ  
とつしはあつしはあつしはあ

世業平船長

海に神のまはるる湊川あつしはあ  
大車之海まに知つしはあ

冷多代

侍人のこつしはあつしはあ

とあつしはあ

大車三位

はまむねはあつしはあ  
後一全代書日行幸の上東門院おのり

とあつしはあ

法華寺入道

とあつしはあ  
とあつしはあ

上東門院

とあつしはあ  
又とあつしはあ  
か

あしきつとあまはしとねけらるる年よまぬある人もまららる  
しりりあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
いかにあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
いかにあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと

道一

あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと

天曆神製

都より雲ねはまらるるおむのしるはあまぬあしきつとあまぬあしきつと

道一

あまぬ

百歳のしるのしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
十訓抄しる範民神々あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
こまらるるしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
しるあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと  
あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと

あまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつとあまぬあしきつと





貧しくて妻すくくしに糧あつたらば  
よよーあつていぬと定家ゆれやとく

晴るうきりぬのそとの虚平地と一打らんふむとらん  
と

定家うちうらむ極むんそんとて石ひあつたらうとていふれ  
あ茶白は尊公へ流鏝をうけて

昌俊

およぐにやとせし魚やうかか一牛お南をうけてとていふらん

返一

四八三三

魚は志村をぬかぬにぬぬのあつらんうらむ字半は角や

池沼長とらぬのあつし

三札

そいふの切あつたきとけいぬひあはあもくんのきとていふ

うら

三津

あつたやう極切あつたきいふのそんのなまを返くさう

田舎徳の侍とれた意意傍を門よまらさ

とぬひあつてこの傍の煙又いとていふ

流しとていふとていふ侍を屠たけより

あつたあはれとていふ

ウロケチ  
之編地<sup>ウロケチ</sup>を<sup>ム</sup>海<sup>ノ</sup>路<sup>ニ</sup>通<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>敷<sup>カ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

述一

借正巻意

いふやいれむもてもてしむる<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

平時新期片

角あぬいもの<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

隆是経師

述一

もの<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

漢倉進得也<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

錢あり

至定國所

四十四

錢子<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>お<sup>カ</sup>り<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

述一

源孝正

一<sup>ハ</sup>お<sup>カ</sup>り<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

と<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

よ<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

伊<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

あり<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

つ<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>

先<sup>ハ</sup>事<sup>ナ</sup>ら<sup>ズ</sup>也<sup>ト</sup>作<sup>ラ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>ハ</sup>毎<sup>ニ</sup>之<sup>ト</sup>は<sup>事</sup>ナ<sup>リ</sup>





―て後々羽上皇れ敵<sup>エト</sup>意<sup>コウ</sup>にけつひひとさ  
らうらうのあやうらあうらうらめおさるつとき  
あり

眼の痛おま

悪向は眼に病おまひとさうらまは眼今には  
らうら病おまをさうらうらうら眼の痛  
さうらうらうらうらうら眼の痛  
さうらうらうらうらうら眼の痛  
さうらうらうらうらうら眼の痛

ほえをまらわら病は治あくら目と病斗  
さうらうら目と病さうらうら病は治あくら目と病斗  
さうらうら目と病さうらうら病は治あくら目と病斗  
さうらうら目と病さうらうら病は治あくら目と病斗  
さうらうら目と病さうらうら病は治あくら目と病斗

こころの事毎に云病は年以  
病をくくくくく病をくくくく  
い平の病もあくくくくく病  
八病をくくくくく病をくくくく  
乃りくくくくく病をくくくく  
くくくく病をくくくくく病  
よくくくく病をくくくくく病  
くくくく病をくくくくく病

四病

長程式

山病

四病

岸樹病

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

風燭病

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

浪形病

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

花病

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

七病

長程式

改産病

きんぎょ舟出の川あはれさうくうささかゆらゆらわらわら

胸産病

あめあらし秋はくらくらもたけのきんぎょさかきまんとく

轉産病

きんぎょさかきまんとくさかきまんとくさかきまんとく

産子病

きんぎょさかきまんとくさかきまんとくさかきまんとく

産風病

人さかきまんとくさかきまんとくさかきまんとく

産約病

あまの山流れあはれさうくうささかゆらゆらわらわら

産産病

きんぎょさかきまんとくさかきまんとくさかきまんとく

産病

同産病

きんぎょさかきまんとくさかきまんとくさかきまんとく

産思病

おひさかたのしるしあるはなもがむのなびをらんけり

欄 蝶 痛

かられ日のくれをもとにぞくほよといも〜うたにまうら

流 鶴 痛

昔の冬、あきをしりあはれ〜はなをうら〜はなをうら

流 鶴 痛

冬もあはれにせしめをさ〜これらの枝は花を〜あ〜ん

流 鶴 痛

一昔れ中不寐思郷の上は下との白也

中 飽 痛

本用れ字あり〜しき用あり〜く〜ん

流 悔 痛

速によむと於に〜はなよ〜き〜あ〜ん〜り

流 悔 あり

ねん〜ははの病本病病外ハ平路病病全き〜んは

き〜ん〜あ〜ん〜や

字 余 り あり

を代風解云三十一字とあり〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん



子細ありしは終くして廿二日申す事ありと云

他例

年ありしははるかに老なるといふは心とていかにあはれか  
くつとては奔逸に滞ありおんの人といふは心とていかに  
たしむるは心ありしは中絶病あり  
ては海に波ありていかにあはれか心とていかにあはれか  
たれは二十二字あり  
はあはれか心とていかにあはれか心とていかにあはれか  
たれは二十二字あり

又後集々述懐百首を記す

去年はもとくはあはれか心とていかにあはれか心とていかにあはれか  
たれは二十二字あり  
初らふは心とていかにあはれか心とていかにあはれか  
あはれか心とていかにあはれか心とていかにあはれか  
あはれか心とていかにあはれか心とていかにあはれか

終に福拍子打事

遊舟軍書に終に福拍子打りし事あり終に音律あり  
しは終に福拍子打りし事あり終に音律あり

とて筆を人の言機よ〜〜にありとて〜  
揚子とて〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
まよひも〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
りり揚子に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
ま〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
一向不空ある妙あり〜〜今世に〜〜に〜〜に〜  
りり揚子とて〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
字あり〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
大白子重の勢

月を夜にちよあ〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
山麓下の白秋あり〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
千金〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜

秀与の勢

京控葉門に創子あり〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
秀与とて〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
遊也とて〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜  
た〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜〜に〜

可き事なりし一行事おぼしめされたりしに  
秀白と記し入りしれども結句に記ししに  
志ししに記しし結句にしされたりしに  
白ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに  
ししに記しし結句にしされたりしに

うらみありしに志ししに記ししに  
記ししに志ししに記ししに  
人多しに志ししに記ししに  
てふに志ししに記ししに  
浦に志ししに記ししに  
志ししに記ししに記ししに  
志ししに記ししに記ししに  
志ししに記ししに記ししに  
志ししに記ししに記ししに  
志ししに記ししに記ししに

隔夕の事

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

RODA B

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

きりぎりすの日にしるしあり一車くらハ幸お  
るまじくはれとちしむかみまきかてふはせむ鏡あ  
らひのまへにけいけつて約のまじくしむまじくはら  
しりしるのまじくはらまじくはらまじくはら  
古人まじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
用まじくはらまじくはらまじくはらまじくはらま  
しりしるのまじくはらまじくはらまじくはらま  
ひまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
福とけまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
御飾ミカヅ

御飾

ものまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
余まじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
しりしるのまじくはらまじくはらまじくはらま  
のまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
ねまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
まじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
けまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
坂田まじくはらまじくはらまじくはらまじくはら  
あるまじくはらまじくはらまじくはらまじくはら

投<sup>チ</sup>り時<sup>トキ</sup>弄<sup>ナマ</sup>基<sup>キ</sup>れ<sup>レ</sup>流<sup>リ</sup>者<sup>ヲ</sup>め<sup>シ</sup>た<sup>ニ</sup>う<sup>レ</sup>ら<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>い<sup>キ</sup>き<sup>ム</sup>の<sup>程</sup>言<sup>ハ</sup>  
 け<sup>テ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>然<sup>ラ</sup>ル<sup>ガ</sup>若<sup>シ</sup>く<sup>レ</sup>い<sup>ク</sup>切<sup>キ</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>サ<sup>ウ</sup>カ<sup>シ</sup>キ<sup>キ</sup>  
 ら<sup>し</sup>ら<sup>く</sup>業<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ハ</sup>龍<sup>ノ</sup>凡<sup>ノ</sup>呼<sup>ヒ</sup>の<sup>凡</sup>状<sup>ノ</sup>も<sup>シ</sup>け<sup>レ</sup>て<sup>シ</sup>け<sup>レ</sup>  
 と<sup>ハ</sup>り<sup>キ</sup>多<sup>ク</sup>流<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>て<sup>ハ</sup>初<sup>メ</sup>日<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>扱<sup>ク</sup>れ<sup>ら</sup>う<sup>ル</sup>お<sup>も</sup>や<sup>す</sup>け<sup>レ</sup>  
 り<sup>キ</sup>し<sup>に</sup>切<sup>キ</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>流<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>ら<sup>う</sup>流<sup>レ</sup>や<sup>す</sup>  
 斗<sup>ノ</sup>流<sup>レ</sup>ど<sup>う</sup>と<sup>ハ</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>大<sup>ノ</sup>骨<sup>ノ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>と<sup>ハ</sup>笑<sup>ハ</sup>ひ<sup>し</sup>と<sup>ハ</sup>せ<sup>し</sup>  
 聖<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>に<sup>ハ</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ぬ<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>の<sup>故</sup>  
 聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>身<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ぬ<sup>レ</sup>扱<sup>ク</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>  
 流<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ぬ<sup>レ</sup>扱<sup>ク</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>

えおの目<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>も<sup>シ</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>流<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ぬ<sup>レ</sup>扱<sup>ク</sup>ら<sup>し</sup>い<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>

敬<sup>ウ</sup>今<sup>ノ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>

ハ<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>敬<sup>ウ</sup>今<sup>ノ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>  
 一<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>  
 も<sup>シ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>  
 も<sup>シ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>  
 も<sup>シ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>  
 も<sup>シ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>レ</sup>お<sup>も</sup>い<sup>く</sup>ま<sup>り</sup>な<sup>ら</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>ハ</sup>聖<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>失<sup>レ</sup>踏<sup>ル</sup>ま<sup>り</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>徒</sup>



秋より秋のきほくはーとーとあるんーうは  
まてきりーいあー

第一のうとして切くる歌

澄るぬ縁上人の秋は色よあはれーいれ東の下あ

第二のうとして切くる

夏とともんぬ人の秋は秋てあはれよしの神のうまは

第三のうとして切くる

秋ていあまけうのうのあはれよとてあはれなるなり

第四のうとして切くる

四十八

あまのうらぬた松は秋よひて懸あくある。庵は山く歩  
才のうとして切くる

昔ある屋は川のあはれ池にあはれあのおのさうそひら

切らまもたまふは海まにまらふ

庵は山く歩

いづれはあまのうらぬた松は秋よひて懸あくある。庵は山く歩  
よむーいれ其のうらぬた松は秋よひて懸あくある。庵は山く歩  
うらぬた松は秋よひて懸あくある。庵は山く歩  
あまのうらぬた松は秋よひて懸あくある。庵は山く歩





はつとわたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
いゝはつとわたりしつゝわたりしつゝ  
又いゝはつとわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
あるわたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
なつとわたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ

と他例をかきしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ  
わたりしつゝわたりしつゝわたりしつゝ

あつたわたりしつゝわたりしつゝ

遊舟

ちろくとたのきうもあひ共遊の帆へうらり

紅葉の舟

尺杵

響きこ實み流ならばゆく行ゆくはるゝ高たか雄ゆうの紅葉かぜなるは

まよひ歎なげけり一年いちねんをきき名なある浪なみうらるゝも海うみ

江戸本町筋通池町南側

真屋重三郎板

初六十二

のほほほ眼まなこの葉は形かたちのさる材せいもあ  
くす毒どく物ものはるも赤あかい色いろの  
しらふを秋あき葉はのり行ゆくはるるは  
みりしるしるしるしるしるしるしるし  
斗たうもあはるは色いろの好こく遊ゆうも  
雪ゆき月つき花はな情なさけはあをしるあ  
其その見み大だい方はうや又またも美みさ  
といはるはるはるはるはるはるはるはる  
かゝれぬ此こゝはるはるはるはるはるはるはる

本は教よりともなきがくあはらむらり  
りしはぶよりともなきはねと相教  
似く落首なるありありあはれ  
此はありありありありありあり  
己はきくはしはしはしはしはし  
福よりゆくゆくゆくゆくゆくゆく  
己は世に志しはしはしはしはし  
いへくあはれ又きくはしはしはし  
手はくはくはくはくはくはくはく

よる中折宿するはの中よあはれ  
江戸よりくくくくくくくくく  
か衣摺師先生との志しはしはし  
あはれと大い生雙字字字字字  
冬は日も曉はるくくくくくく  
さうられありありありありあり  
隠後の門人きくくくくくくく  
りねいよして遠く境より此事  
余り耕書書はありありありあり

志きりし未く志堂およそくとも  
 初ら抄紙持行は是しり中る六家の三書  
 正しくけ書しよるもの得詠一とて  
 書しりその徳くともいしりあたる  
 あしりし良き通し伴て菜園子入り  
 ましりと酒月お来入りり

耕書堂藏板狂歌書物目録

鶉夜

尾陽也有翁述わりあまねく狂歌をいふは後自然の  
 前編全二冊 初編全二冊 後編全二冊

同

同他 小形中世 後編全二冊

四方南

赤良先生述 後編全二冊 初編全二冊

狂歌才苑集

赤良先生撰 四季哀雅神歌夜集の附言  
 名家の才苑多くあつたり 全二冊

同千里同風

同作 全二冊

同河心杯

赤良先生撰 全一冊

同故混馬鹿集

赤良先生撰 全二冊

古今集小の四季哀雅神歌 慶安の名家とあつたり

同演のきこ

元本綱著 狂歌歌集小のきこ 懐中本全 初編全二冊

同風百首

同作 全 近刻

同落栗草庵集

同作 全 近刻

画本著聞集

宿屋敏盛撰 全十册近刻

北尾経平画

尚阿程吉所相使の  
ありと終りて  
其相使との  
なり

狂歌簡

全

庶都部貞顔撰

言志の狂歌師  
卷の集り  
なり

同と夜風呂

全

同撰茶屋  
真と撰

同百鬼夜狂

全

四方先生撰  
狂歌師の百首

拾遺夷曲集

全二册

唐衣橋剛先生撰

四季哀雜神歌  
尚阿程吉の家  
なり

狂歌秘抄

全

同作淡方  
なり

同い

諸向

全

追福の  
なり

同懐中抄

全

はりの光著

狂歌師  
なり

題林

狂歌

同撰

奇羅金鶏輯

全

狂歌師  
なり

素子  
なり

仇

